

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01326

研究課題名（和文）清代「内陸アジア交易ネットワーク」の形成・展開と文化変容における歴史的特徴の解明

研究課題名（英文）Elucidation of Historical Features of the Formation, Development, and Cultural Transformation of the Qing Dynasty's 'Inland Asian Trade Network'

研究代表者

加藤 直人（KATO, Naoto）

日本大学・文理学部・名誉教授

研究者番号：90130468

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究期間中に、中国内モンゴルと中国東北地域において実施した旅蒙商の活動足跡を辿るフィールドワークと、日本国内外での満洲語・モンゴル語・漢語・ロシア語などの関連文献史料の調査・検討を通じて、「内陸アジア交易ネットワーク」がもたらす社会・文化変容の諸特徴の追究を行った。その結果、清代に形成された中国東北地域と内モンゴルを連結する交易ネットワークが、20世紀迄持続的に機能すると同時に、公権力から相対的に自立した政治・社会空間の形成をもたらす場合があることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、満洲語・モンゴル語・漢語・ロシア語などの多言語史料を用いた徹底した文献研究と、旅蒙商交易路の現地調査を通じて、内陸アジア交易ネットワークが、現地社会に如何なる社会的・文化的な影響を与えたのかを明らかにすることにある。

また、その社会的意義は、現在、中国の「一帯一路」政策に象徴される国家を跨ぐ形で展開する交易ネットワークが現地社会に如何なるダイナミズムを惹起するののかという今日的課題への、貴重な歴史的知見を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：During the course of this study, the characteristics of the social and cultural transformations brought about by the inland Asia trade network were elucidated. This was achieved through fieldwork conducted in Inner Mongolia in China and northeastern China to trace the activities of traveling Mongolian merchants and through an examination of documents written in Manchu, Mongolian, Chinese, Russian, and other languages conducted in Japan and elsewhere. The results revealed that the trade network linking Inner Mongolia in China and Northeastern China, which formed in the Qing Dynasty, continued to function through the 20th century, and that this network could create a political and social space that is relatively independent of government authority.

研究分野：清朝史

キーワード：内モンゴル 旅蒙商 内陸華僑 交易ネットワーク 中国東北 韓辺外 清朝

1. 研究開始当初の背景

近年における中国の経済大国化は、2014年11月のアジア太平洋経済協力首脳会議で提唱された「一帯一路」経済圏構想に象徴されるように、水陸両面から存在した「内陸アジア交易ネットワーク」の存在を改めてクローズアップさせてきている。

この点を、北アジア史、東北アジア史に引きつけて考えると、清朝時代において「旅蒙商」などと呼称された内陸華僑 (Inland Chinese) の活動を軸に形成され、北アジアと東北アジアを架橋し中央アジア・ロシアへと展開された交易ネットワークが、21世紀に改めて復活しつつあるのではということ想起されるものともなっている。もちろん、清代に形成されたものと現在の交易ネットワークの安易な一体視は厳に慎まなければならないが、清代に形成されたこの交易の広域ネットワークが如何なる実態を持ったのかを解明しておくことは、「一帯一路」政策のもたらしつつある各地域での摩擦が正しく歴史的・文化的様相をもって惹起されている現実をふまえる時、単に清代の北アジアと東北アジアの地域社会を理解するというところに止まらない、現代社会における歴史的知見の提供という一面を持ち得るものとなっている。

しかも、従来の当該研究では、その広域性が個々の地域ネットワークと如何なる相互連関・相互変容をもって形成・展開したのかを十分明らかにされておらず、1990年代以降新たな研究水準を構築してきた海域華僑 (Overseas Chinese) と連結し得るレベルの研究結果が提示されてこなかった。このことは、陸路・水路・海路のトータリティーとして構築された清代の交易ネットワークの全貌解明の障害ともなっている。

本研究では、以上の学術的背景が持つ問題点の克服を目指し、近代に直結する清代の内陸アジアにも存在していた交易ネットワークに着目し、その形成・展開と文化変容における歴史的特徴の実態解明と、現代的意義を有する知見の提示を図るものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「旅蒙商」などと呼称された内陸華僑 (Inland Chinese) の活動を軸に形成・展開された、北アジア、東北アジアに形成された陸路・水路の「内陸アジア交易ネットワーク」と、そこにおける社会・文化変容の諸特徴を、当該地域における各国の政治的な流れを踏まえて明らかにするものである。それは、既刊文書史料の精査はもちろんのこと、現地調査により新たに収集された様々な資料の分析結果を加えることで、当該領域における諸主体に対する新たな実証水準の提示のみならず、所謂「一帯一路」政策推進の中で、ロシア、モンゴル、中国、朝鮮、日本などをアクターとしつつ、正しく世界的規模で様々な軋轢や課題を生じつつある21世紀の北アジアや東北アジアにおける当該領域の諸問題を検討する上での歴史的知見の提供を目指すものでもある。

3. 研究の方法

本研究の方法的特色は、満洲語・モンゴル語・漢語・ロシア語などの多言語史料を用いた徹底した文献研究と、水陸の交易路を踏査し、碑刻・史跡・遺構を調査し、小さな資料館や個人所蔵の文物・文献までも調査する現地調査を融合する点にある。これにより、①清朝・ロマノフ朝といった王朝レベル、②モンゴル・ツングース系の首長レベル、③現地社会で暮らしてきたモンゴル・ツングース系の諸族とその間を往来した商人レベル (内陸華僑 [Inland Chinese]) という、3つの視座からの立体的な「内陸アジア交易ネットワーク」の提示を目指すものである。

従来の当該地域の歴史研究は、清朝、ロシア、またはモンゴル首長層の「公式」見解に基づくものであり、当該地域に生活する人々を抜きにして歴史が語られてきた。本研究では、「公式」見解が形成される前の「生」の文書史料群を徹底的に調査するとともに、現地を踏査して、史跡・遺構・文物まで調査する。本研究では、「公式」見解が形成される前の文書史料の内容を確認するとともに、書き記された文書の内容と、現地で調査した史跡、遺構、文物に、矛盾・懸隔がないかを検討し、もし矛盾・懸隔があれば、それは何によるのかを考察し、より精度の高い研究を目指す。このような徹底した文献調査と現地調査を融合させた研究は、学界に新たな研究方法を提示することにもなり、同時に、現在、関連諸国の国家意思が現地社会実態により大きく変容しダイナミズムを惹起している当該領域の諸問題への対応を考察する上での、貴重な歴史的知見を提供するものでもある。

以上の研究方法を前提に本研究は、研究期間は3年と設定し (実際には、完成年度が令和2年度から令和5年度に延び、3年間の延長となった)、多言語で多様な地域にまたがる文献調査や交易ルートの現地調査遂行のために、専門研究領域が異なる研究協力者を加え研究を実施した。

具体的には、清朝側商人集団で「旅蒙商」と呼称された内陸華僑 (Inland Chinese) のネット

ワークを対象とする「中国内地・内モンゴル班」（華立、杉山清彦、広川佐保）、ロシア商人のネットワークを対象とする「ロシア・モンゴル班」（中見立夫、柳澤明）、清朝政権自体（特に理藩院と内務府）やモンゴル系・ツングース系首長層のネットワークを対象とする「中国東北班」（江夏由樹、松重充浩）の3班を形成し、各班間でオンライン会議なども利用して可能な限り討議を重ねつつ、研究代表者（加藤直人）が各班を統括して研究を進行した。

また、研究期間の年度ごとの研究内容は以下の通りである。

- (1) 平成31年度：公益財団法人東洋文庫をはじめとした関係機関での文献調査に加えて、中国東北地域の中部から西部（長春～吉林～朝鮮国境 [韓辺外]）にかけての陸路・水路の交易ルートの現地調査を行い、現地研究者の協力を得て関連史蹟の踏査と関連文献の収集を行った。
- (2) 令和2年～令和3年度：当初は、ロシアのザバイカルとモンゴルを結ぶ交易ネットワーク、モンゴルとアムール河水系を結ぶ交易ネットワークの踏査を予定していたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延のため調査を延長することとして、研究を国内での文献調査・収集に特化して遂行した。
- (3) 令和4年度：日本での新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の猛威は収まる傾向にあったが、中国では同感染症の余波もあり、現地調査を遂行する環境は整わなかったことから、この年度も現地調査は延期として、文献調査の成果を踏まえた研究協力者との相互討議の成果として、モンゴル社会の変容に関する論集と、豊富な写真資料を掲載した現地調査記録に関する図書を刊行した。
- (4) 令和5年度：内モンゴルの旅蒙商移動ルートの現地調査を実施し（北京→フフホト→武川→百靈廟→滿都拉鎮→二連浩特→スニド右旗→正藍旗→多倫→困場→承德→北京）、現地研究者の協力を得て関連史蹟の踏査と関連文献の収集を行った。また、研究の最終年度ということで、本研究成果の取り纏めを行った。

4. 研究成果

本研究の成果は、後掲リストが示す通り、様々な学術雑誌での論文や学会での報告などの形で公開されている通りであるが、特筆すべきものとしては、次の3点をあげることができる。

1 点目は、多言語の文献を駆使した論集の刊行である。『「帝国」の秩序と再編：モンゴルの史書と史跡の探求』は、ロシア語、モンゴル語、中国語、チベット語などの、内陸アジア交易ネットワークにおいて使用された主要言語を利用して、18～20世紀のモンゴル地域の政治・経済・社会・文化の変容実態を明らかにしたもので、内陸アジア地域において、地域間の人的・物的移動が、想定上に活発に展開していることと、現地における政治的権威を含む文化的認識においても諸主体間における深い連関性が確認でき、多様な民族、文化が、時々の国家権力と多様な関係を構築しながら、相互連関的に相互変容していく実相が確認できる成果となっている。

2 点目は、実地調査による成果である。この点に関しては、誠に遺憾ながら、実施時期を繰り返し延長せざるを得なく（平成31年度～令和3年度分の予算を繰り返し越した）、また当初の予定を大幅に縮小（モンゴル国とロシアでの現地調査を断念）する形での実施とならざるを得なかったが、以下の成果を得ることができた。

平成31年度に実施した、中国東北地域（北京、長春、吉林、樺甸 [夾皮溝鎮・『韓辺外』]）での現地調査では、松花江水運を考える上で重要な清代の船廠（造船所）の中心地が「阿什哈達磨崖碑」の所在地と異なることを確認できた。加えて、聞き取り調査を通じて吉林市で既に消失している移住してきたモンゴル系バルガ人由来する「巴虎爾門」の位置特定や、清朝の宮廷用物品（毛皮等）の調達にあたる「打牲烏拉総管衙門」が置かれた烏拉街の諸建築調査を通じて流通機能に都市形成における役割に関する知見の収集も行った。これらの成果は、旅蒙商が展開する前提となる、民族地理と経済地理を統一的に把握する上で基礎的なデータとなり得るものであり、令和2年度以降の考察において有益な成果となった。加えて、「韓辺外」の調査では、旅蒙商らにより形成された内陸交易ネットワークが、清朝統治力の後退と西洋列強に進出が顕在化する19世紀後半において、中国本土から東北地域への移民漢人の地域内再移動の前提を形成し、辛亥革命に至る中国東北地域北部の政治的ダイナミズムを生み出す源泉の一つとなっていることが明らかになり、「内陸アジア交易ネットワーク」の歴史的持続性と現地社会への影響を考察する上で好個な歴史的事例の提供という成果を得ることができた。

加えて、令和5年度に実施した、内モンゴルの旅蒙商移動ルートの現地調査を通じて、清代の旅蒙商らの活動ルート上の拠点では、その活動痕跡を、自然景観を含めて確認することができ、今後の関連文献理解を深めて行く上で補助的な知見を得ることができた。また、いくつかの史跡では、旅蒙商の活動を改めて記録する施設も整備されており、旅蒙商の記録が近現代中国における「中華民族」や領土的一体性の記憶として再規定されつつ保存されている状況も見ることができ、交易ネットワークの柔軟性が、時として政治的な排他的な囲い込みに援用されていくという側面があるという点で、現代ナショナリズムと歴史の考える上で示唆的な知見を得ることができた。

3 点目は、本研究に関する資料の公開についてである。この点については、多様な民族や文化を理解していく上で重要な言わば「補助線」となるビジュアル資料を中心に、『清朝の史跡を

ぐって 2(アムール流域篇)』の編纂に関わる形で、加えて、収集資料の一部については、令和 5 年度日本大学文理学部資料館展示会「記憶と記録のクロスロードとしての哈爾濱—黒崎裕康コレクションの世界—」を通じて、広く社会発信するという成果を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 726
2. 論文標題 東北アジア地域史から考える「満洲国」（1932～45）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と地理	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兔内勇津流（解題）、松重充浩（校注）	4. 巻 42
2. 論文標題 荒木貞夫の口述記録 - 「シベリア出兵」について -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代中国研究彙報	6. 最初と最後の頁 1-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 104
2. 論文標題 『満蒙』誌上における伊藤順三：在満日本人による「満洲」認識形成過程に関する事例研究として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史叢	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 43
2. 論文標題 『満鉄調査時報』（1919年12月～1931年8月）華中・華南関係記事目録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代中国研究彙報	6. 最初と最後の頁 107-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 22
2. 論文標題 資料紹介：『満蒙』掲載の伊藤順三作画一覧	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本大学文理学部情報科学研究所年次研究報告書	6. 最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松重充浩	4. 巻 24
2. 論文標題 『亜東』細目次（『足跡』第2巻第6～12号を含む）一覧	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本大学文理学部情報科学研究所年次研究報告書	6. 最初と最後の頁 23-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤直人	4. 巻 20
2. 論文標題 松村潤先生、細谷良夫先生の思い出	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 満族史研究	6. 最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤直人	4. 巻 104
2. 論文標題 清代の旗人と満洲語	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史叢	6. 最初と最後の頁 7-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤直人
2. 発表標題 關於東洋文庫收藏的滿文文献
3. 学会等名 滿文文献与清史研究国際研討会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松重充浩
2. 発表標題 滿洲事變之前在大連的日本人社會對蒙古的認識：以大連刊行的日語媒體為中心
3. 学会等名 中央研究院近代史研究所學術演講（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松重充浩
2. 発表標題 在大連日本側メディアにおけるシベリア出兵認識 - 『滿洲日日新聞』（1918年9月-1920年12月）掲載関係記事を事例として -
3. 学会等名 2020年度ロシア史研究会大会： <パネルB> 「シベリア出兵を見直す：人々の対応を通じて」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松重充浩
2. 発表標題 『滿洲評論』にみる華南認識 「滿洲国」下における華南認識の事例研究として
3. 学会等名 公益財団法人東洋文庫中国近代史研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 加藤直人、中見立夫、広川佐保（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本大学文理学部史学科研究室	5. 総ページ数 167
3. 書名 「帝国」の秩序と再編：モンゴルの文書と史跡の探求	
1. 著者名 塩澤 珠江（著）、松重充浩（監修）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 草思社	5. 総ページ数 160
3. 書名 『吉田謙吉が撮った戦前の東アジア：1934年満洲 / 1939年南支・朝鮮南部』所収、全体監修及び第1章満洲篇解説	
1. 著者名 松重充浩、加藤直人、陳登武、張哲嘉、金山泰志、林志宏、中田崇、朴敬玉、日吉秀松	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本大学文理学部情報科学研究所	5. 総ページ数 283
3. 書名 東アジアにおける認知空間の諸相 - 具現化される 帝国 : 理念、身体、メディア	
1. 著者名 久保亨・瀧下彩子（編）、松重充浩（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋文庫	5. 総ページ数 406
3. 書名 『戦前日本の華中・華南調査』所収、「大連日本人社会における『華中・華南』情報：総合雑誌『満蒙』を事例として」・「附表」	

1. 著者名 細谷良夫（編著）、加藤直人（第9章分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋文庫	5. 総ページ数 196
3. 書名 『清朝の史跡をめぐる2（アムール流域篇）』所収、第9章「アムール河口からサハリンへ（2011年8月）」	

1. 著者名 松重充浩（編）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 日本大学文理学部資料館	5. 総ページ数 23
3. 書名 展示図録：記憶と記録のクロスロードとしての哈爾濱 黒崎裕康コレクションの世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

令和5年度日本大学文理学部資料館展示会「記憶と記録のクロスロードとしての哈爾濱 黒崎裕康コレクションの世界」（会期：令和6年1月10日～1月25日）	

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	松重 充浩	日本大学・文理学部・教授	
	(MATSUSIGE Mitsuhiro)		
	(00275380)	(32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------